令和 3 年 11 月 23 日

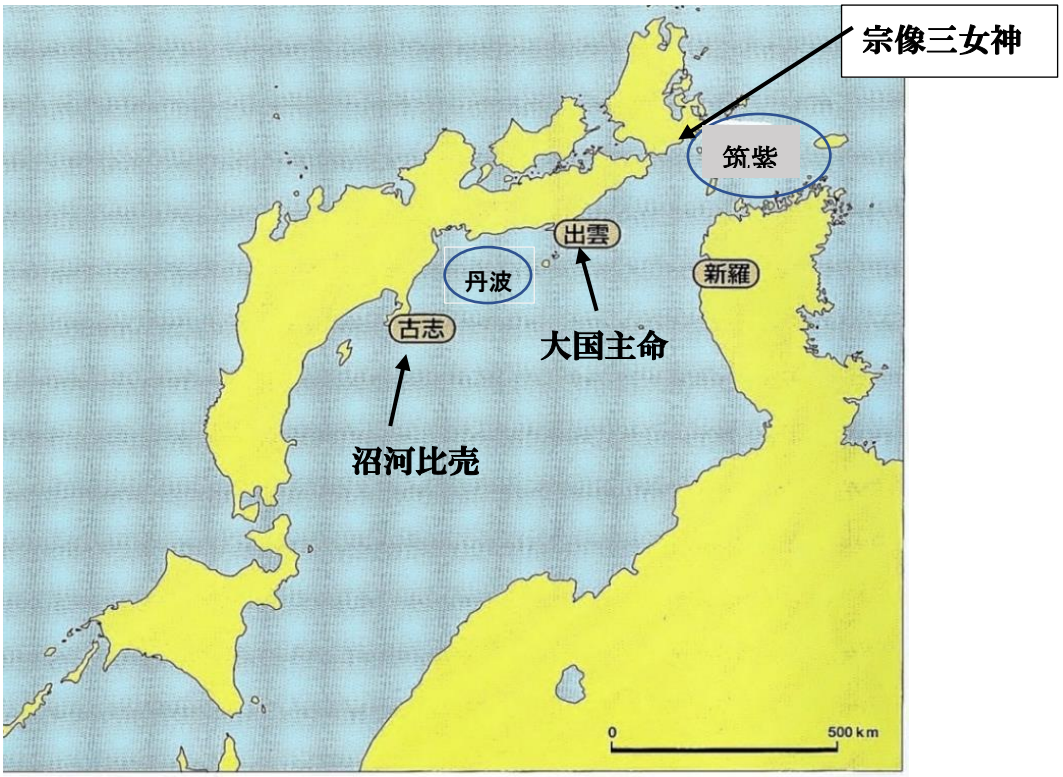
宗像三女神と越の沼河比売

～古代の日本海文化～

河村哲夫

1、古代神話の舞台は日本海側の筑紫と出雲が中心

	筑紫	出雲	越(古志)	説　明
①	イザナギ	イザナミ		神生み・国生み神話
②	天照大神	スサノオ		天照大神は皇祖神
③	宗像三女神	大国主命	沼河比売	



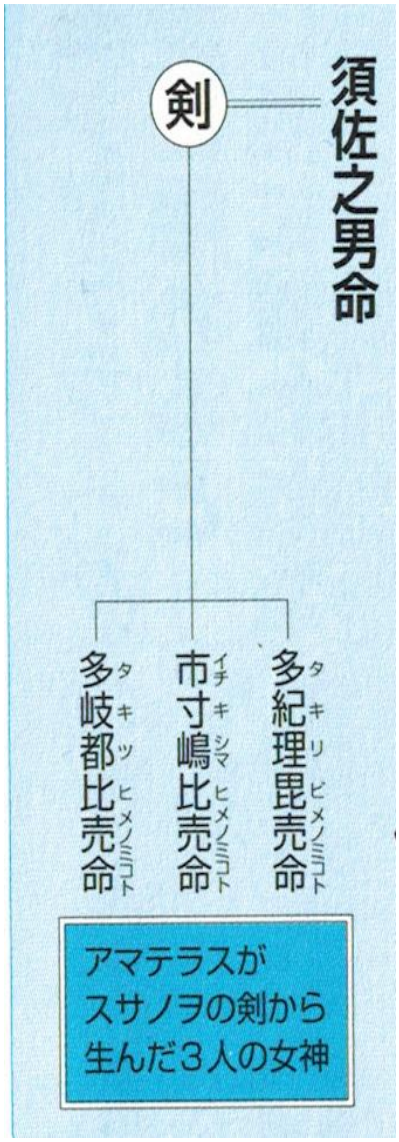
名	拠点	説　　明
大国主命	出雲	①『古事記』・・大国主はスサノヲの六世の孫 ②　『日本書紀』の一書・・大国主はスサノオの七世の孫 ③『日本書紀』本文・・大国主はスサノオの子
宗像三女神	宗像	① 多岐都比売命(神屋楯比売)は大国主命の間に事代主命を生む ② 多紀理比売命は大国主命の間に阿遅鉏高日子根を生む
沼河比売	越の国	① 大国主命の間に建御名方を生む。

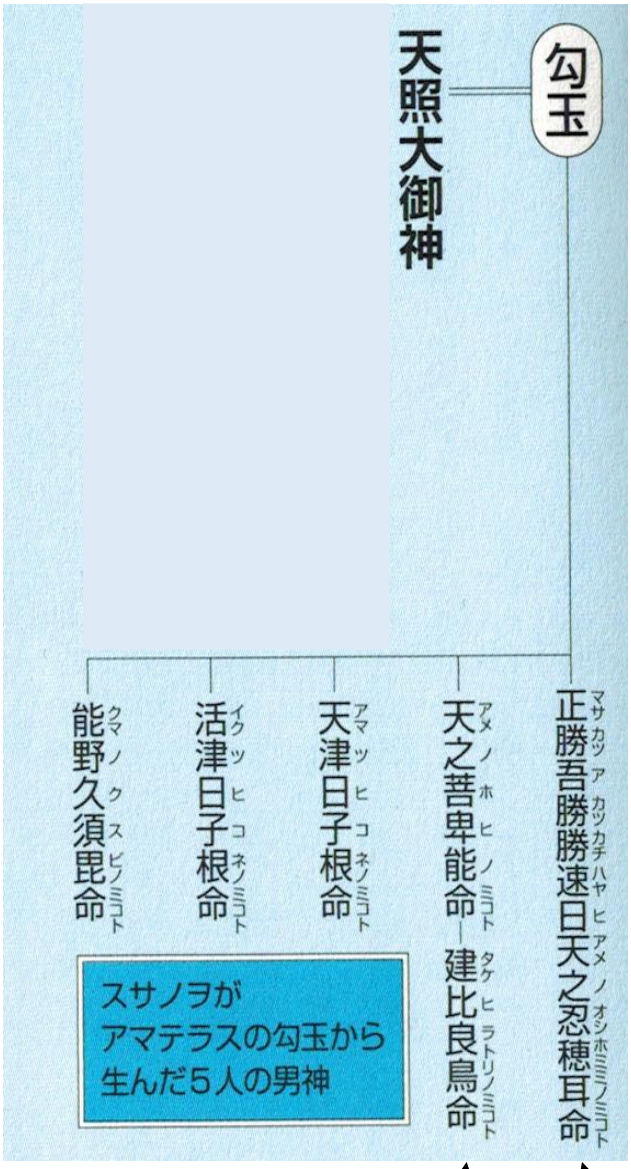
2、宗像三女神

(1)誓約(うけひ)

宗像三女神は天照大神とスサノオの「誓約(うけひ)」によって生まれたとされている。

「誓約(うけひ)」とは、古代日本で行われた「占い」のことで、「宇気比」、「祈」、「誓」などと書も書かれる。





・多岐都比売命と多紀理比売命は大国主命の妃

・市寸嶋比売命はニギハヤヒの妃

出雲神主家の先祖

天皇家の先祖

⑵三宮の祭神

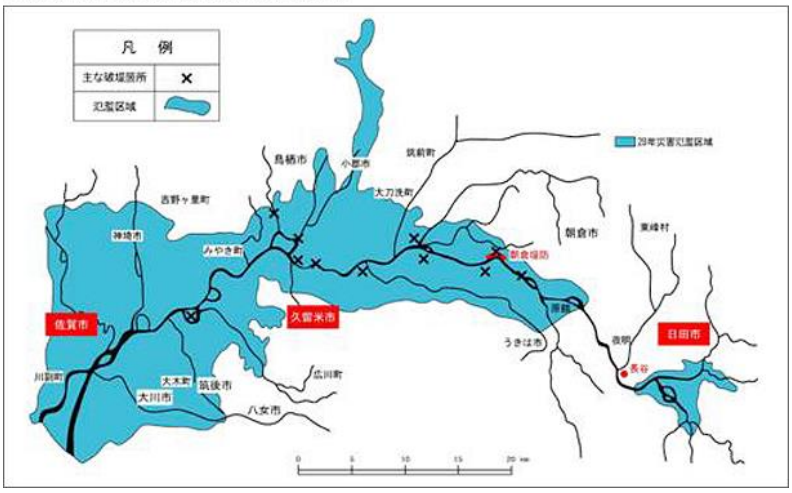
宗像三女神	市寸島比売命	多岐都比売命	多紀理毘売命
	(市杵島姫) (佐手依姫命)	(湍津姫) (高津比咩) (神屋楯比売)	(田心姫) (田霧姫) (奥津島比売命)
○『日本書紀』本文	辺津宮	中津宮	沖津宮
○宗像大社	辺津宮	中津宮	沖津宮
『古事記』	中津宮	辺津宮	沖津宮
『日本書紀』第一の一書	沖津宮	中津宮	辺津宮
『日本書紀』第二の一書	沖津宮	辺津宮	中津宮
『日本書紀』第三の一書	沖津宮	中津宮	辺津宮
沖津宮	3	0	3
中津宮	1	4	1
辺津宮	2	2	2
夫	ニギハヤヒ	大国主命	大国主命
子	天香語山命 (尾張氏)	事代主命 (宗像氏)	阿遲鉏高彦根命 (賀茂氏)

3、宗像三女神の宗像への経路

⑴『日本書紀』神代紀上・第六段第三の一書

「すなわち、日神(天照大神のこと)の生(あ)れませる三柱の女神を以ては、葦原中国の宇佐嶋に降りまさしむ。今、海の北の中の道に在す。号(なづ)けて道主貴(ちぬしのむち)と曰(まう)す。これ、筑紫の水沼君らが祭る神、これなり」

●昭和28年水害の破堤箇所と浸水区域



・筑紫の水沼君は筑後川下流の三潴地域を拠点とした古代豪族。水沼氏も宗像三女神を氏神としていた。

⑵ 宇佐神宮(大分県宇佐市)

①宗像三女神は、葦原中国の宇佐嶋――すなわち、豊前の宇佐(大分県)に天降った。

②祭神

・一之御殿：八幡大神・・ 誉田別尊（応神天皇）

・二之御殿 ：比売大神・・ 宗像三女神（多岐津姫命・市杵島姫命・多紀理命）

・三之御殿：神功皇后・・ 別名、息長足姫命

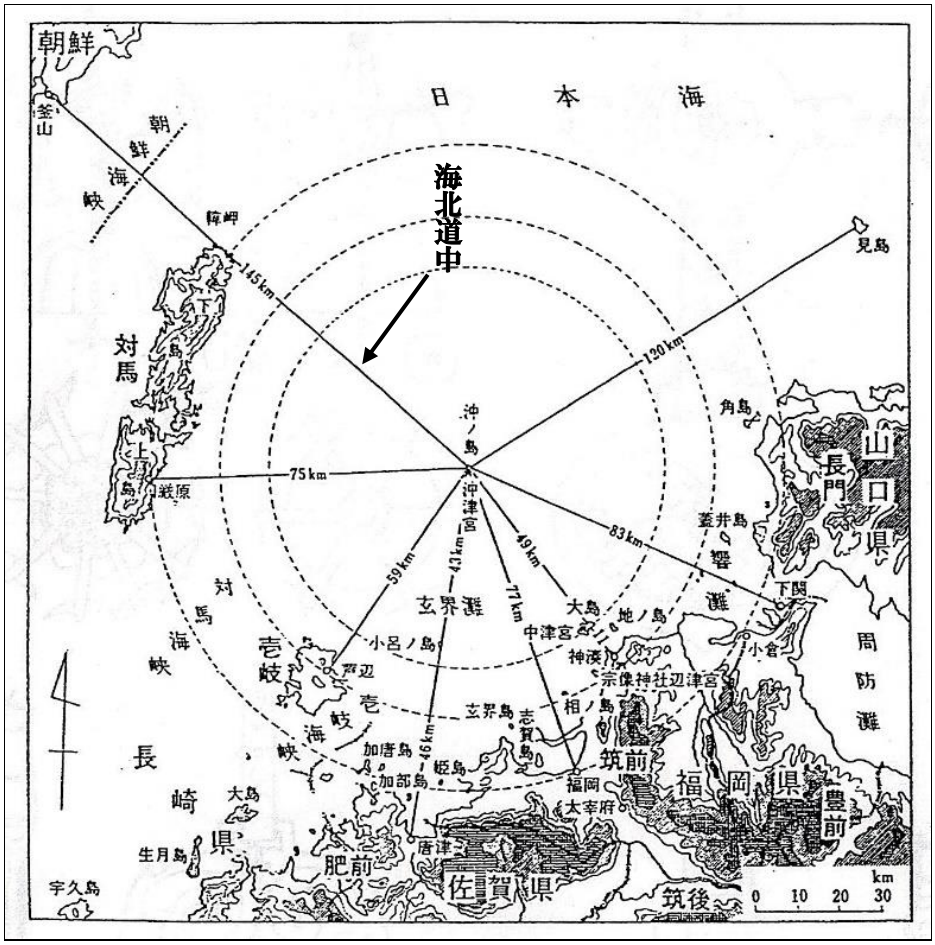
⑶「海北道中」を守護するよう天照大神に命じられる。

①『日本書紀』の一書

「(天照大神は)『汝三神（いまし みはしらのかみ)、道の中に降りて居（ま）して天孫（あめみま）を助け奉（まつ）りて、天孫の為に祭られよ』との神勅を授けた。

②道主貴(ちぬしのむち)

宗像三女神は宗像の地に移動し、道主貴として、「海の北の中の道」(朝鮮航路)を守護する。



(4)宇佐から宗像に至る伝承地

・宇佐→英彦山→飯塚市(飯塚市鹿毛馬)→六ヶ岳(鞍手郡鞍手町)→宗像

○『福岡県神社誌』(昭和 15 年)

神社名	所在地	祭神	境内神社	攝社
①天照神社（県）	鞍手郡宮田町大字磯光字儀長		湍津姫神	
②六獄神社（郷）	西川村大字室木字下方	田心姫命 湍津姫命 市杵島姫命		
③若宮八幡宮（郷）	若宮村大字水原字假屋		嚴島神社 （宗像三神）	
④劔神社（村）	古月村大字木月字片原		神嚴島比賣神社 （嚴島比賣神）	
⑤劔神社（村）	西川村大字新延字火尾	宗像三女神		
⑥須賀神社（村）	小屋瀬町大字小屋瀬字本町東		嚴島神社 （市杵島姫神）	
⑦嚴島神社（村）	宮田町大字上大隈字二反田	市杵島姫尊		
⑧日吉神社（村）	吉川村大字下字高宮	五男三女大神		日原神社 （大国主命）（市杵島姫命） （大山祇命）
⑨日原神社（村）	吉川村大字犬鳴字下り谷	市杵島姫命		
⑩王子神社（村）	直方市感田字八つ辻	市杵島姫命 多紀理姫命 多紀津姫命		
⑪嚴島神社（県）	嘉穂郡頴田村大字鹿毛馬字宮	市杵島姫命 田心姫命 湍津姫命		

表２　福岡県神社史　神社統計表（昭和１５年１１月現在）

① 六ヶ岳(鞍手郡鞍手町)――上宮

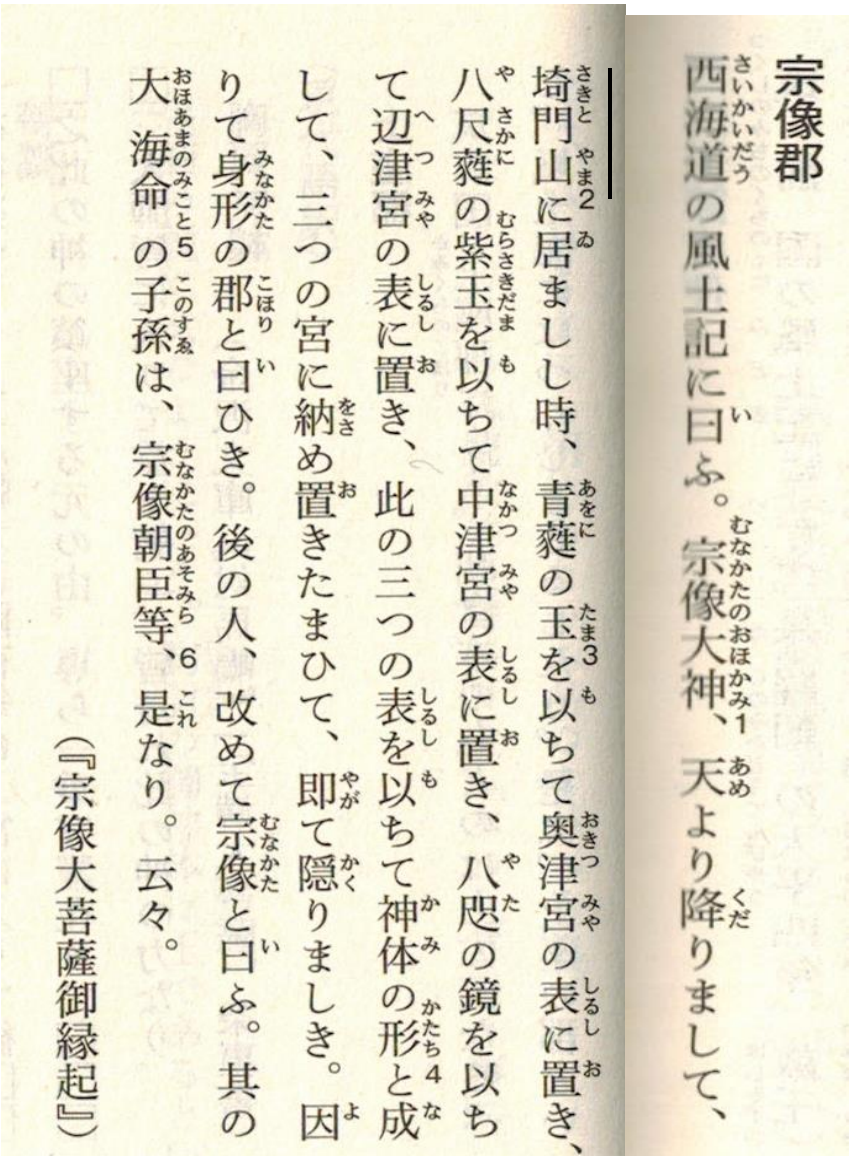
飯塚市の鹿毛馬(かけのうま)を通過し、鞍手郡鞍手町の六ヶ岳(標高 338.9m 旭岳・天冠・羽衣・高祖・崎戸・出穂の六峰)の崎戸に天降りして、そののち宗像に到ったという。

○六嶽神社(鞍手郡鞍手町室木)

【祭神】田心姫之神・湍津姫之神・市杵島姫之神

【由緒】「紀元前七百年ノコロ皇女三神霊山六嶽崎門峰ニ御降臨アリ、此地ヲ上宮ト定メ、室木ノ里ニ下宮ヲ建立シ、安産交通安全ノ守護神トシテ鎮守ノ社トス」

○【筑前国風土記】逸文



宗像郡

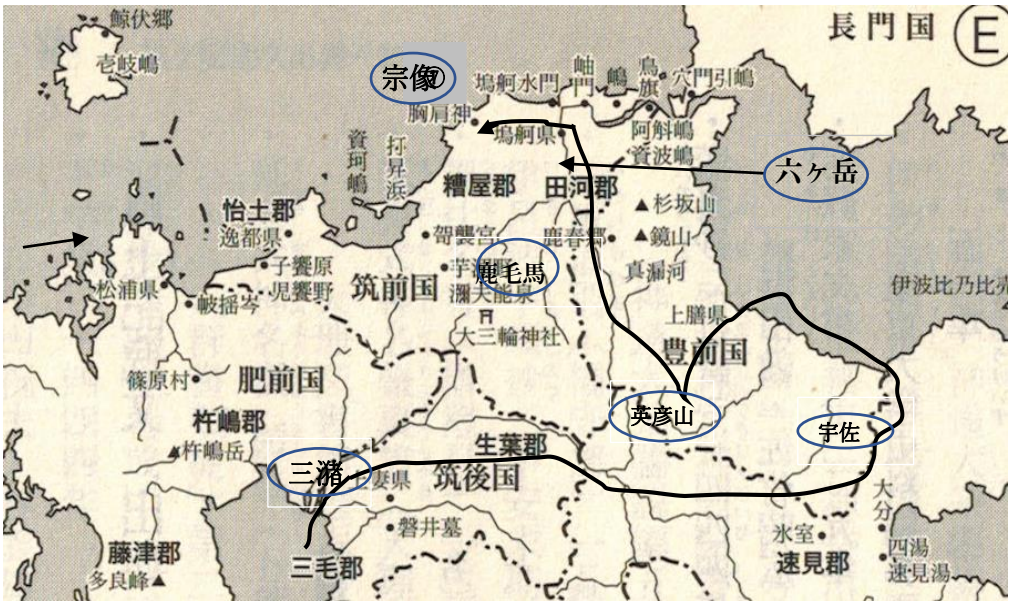
西海道の風土記に曰ふ。宗像大神[1]、天より降りまして、埼門山[2]に居ましし時、青蕤の玉[3]を以ちて奥津宮の表に置き、八尺蕤の紫玉を以ちて中津宮の表に置き、八咫の鏡を以ちて辺津宮の表に置き、此の三つの表を以ちて神体の形[4]と成して、三つの宮に納め置きたまひて、即て隠りましき。因りて身形の郡と曰ひき。後の人、改めて宗像と曰ふ。其の大海命[5]の子孫は、宗像朝臣等[6]、是なり。云々。

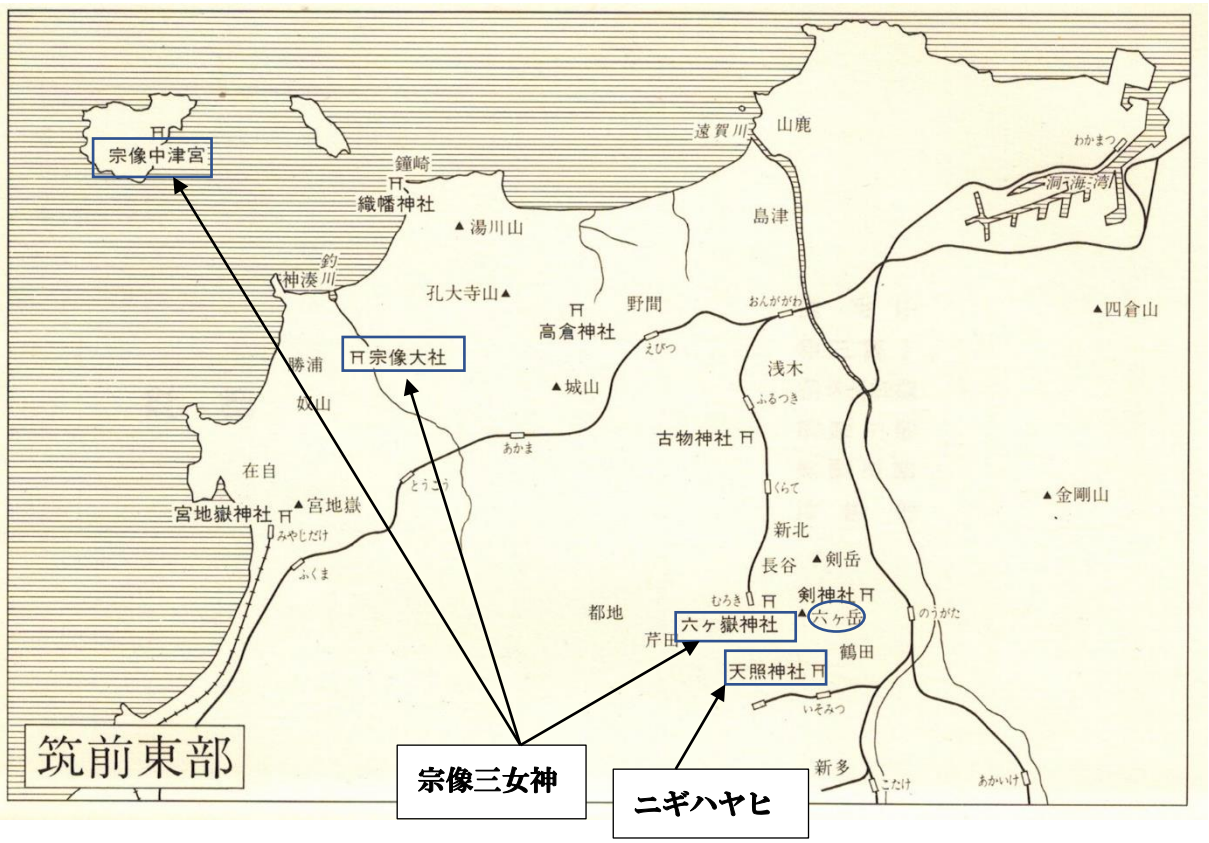
(『宗像大菩薩御縁起』)

②厳島神社(飯塚市鹿毛馬（かけのうま））

【祭神】市杵島姫・田心姫命・湍津姫命

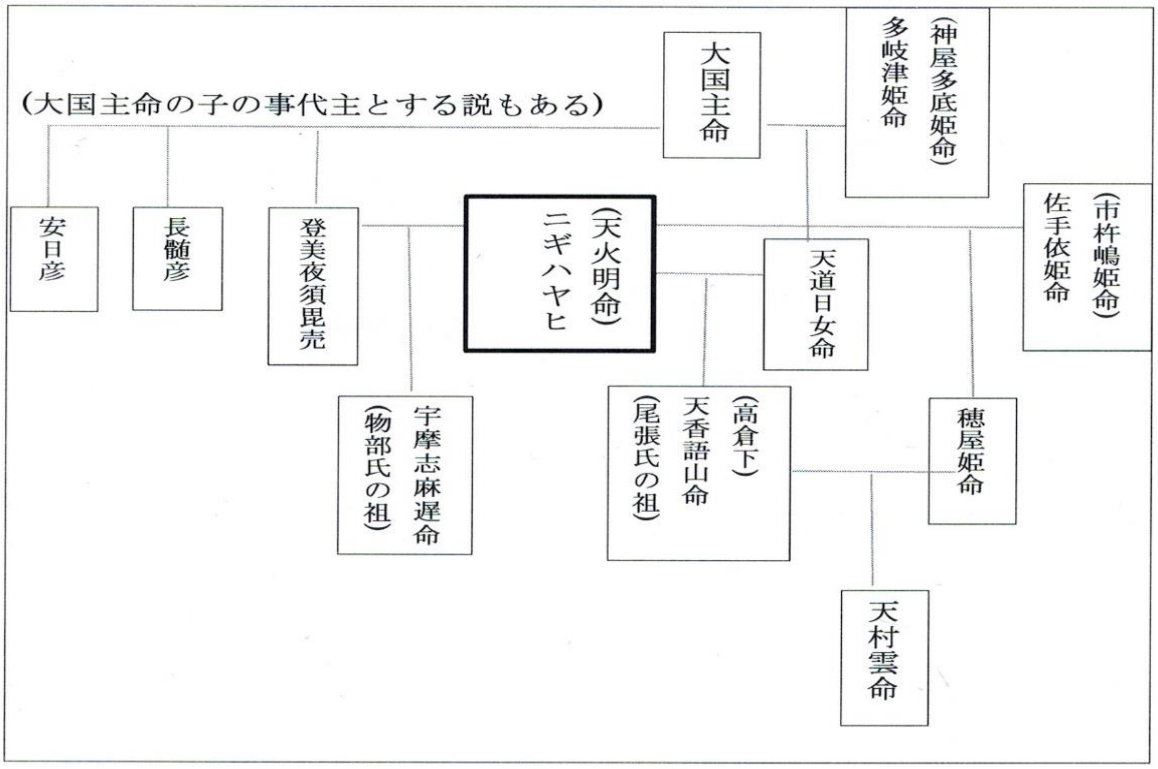
【由緒】もと日思山(日王山)の山上に建立されたが、山上であるため参詣に不便なことから延文年中（1356～1361)、筑前国鹿毛午村へ遷し、天照大神を豊前国神崎村に遷した。



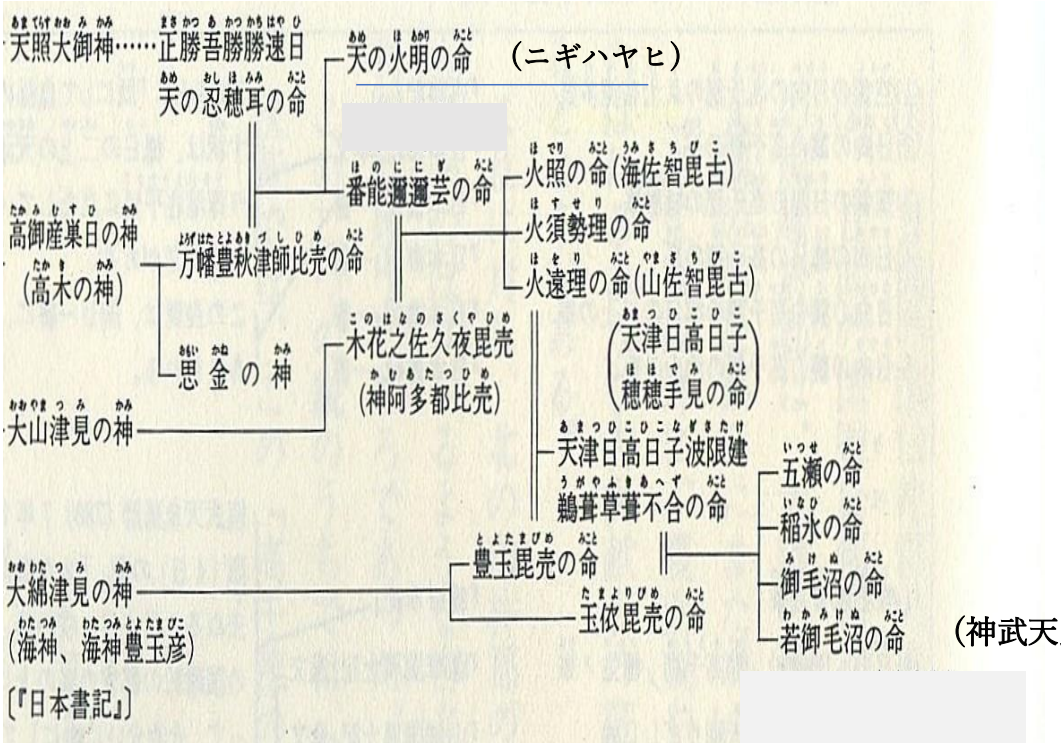


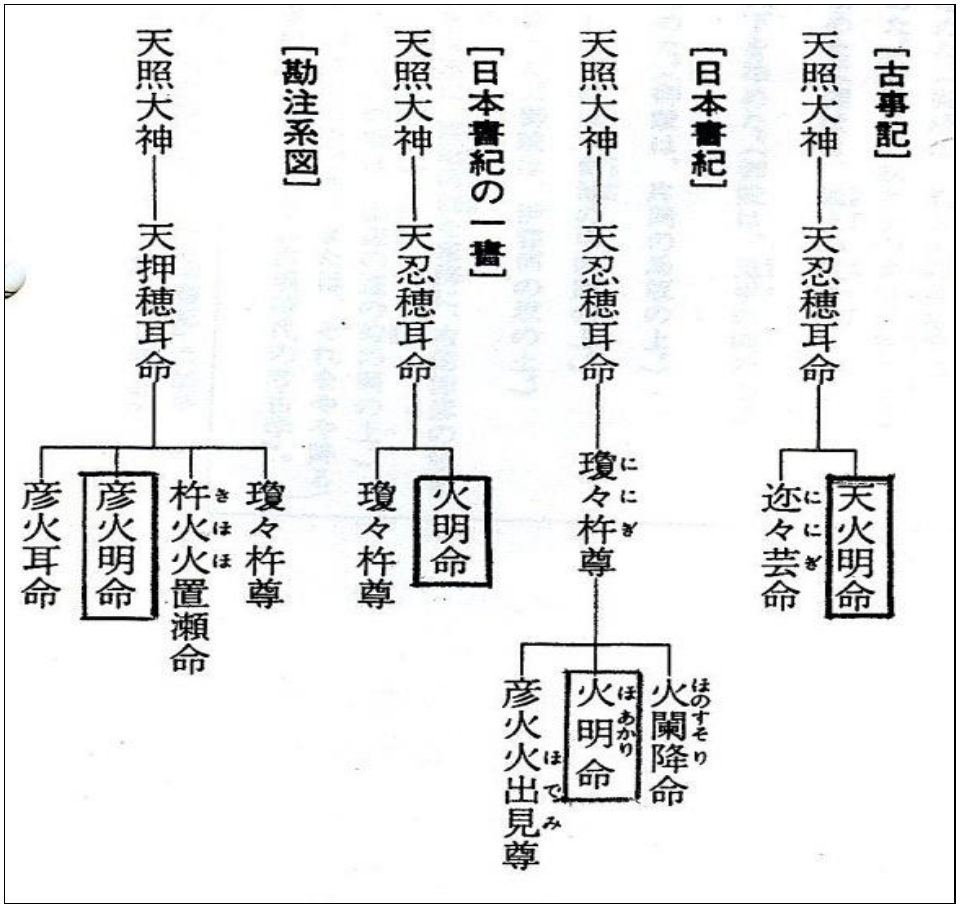
4、ニギハヤヒと市杵嶋姫命

(1)「籠神社勘注系図」(京都府宮津市)



(2)ニギハヤヒ＝天火明命はニニギノミコトの兄弟





5、ニギハヤヒの東遷

⑴『古事記』

①神武天皇の東遷において大和地方の豪族ナガスネヒコが奉じる神として登場する。

②ナガスネヒコの妹のトミヤスビメ（登美夜須毘売）を妻とし、トミヤスビメとの間にウマシマジノミコト（宇摩志麻遅命）をもうけた。ウマシマジノミコトは、物部連、穂積臣、采女臣の祖とされている。

③神武天皇が東征し、それに抵抗したナガスネヒコが敗れた後、神武天皇が天照大神の子孫であることを知り服属した。

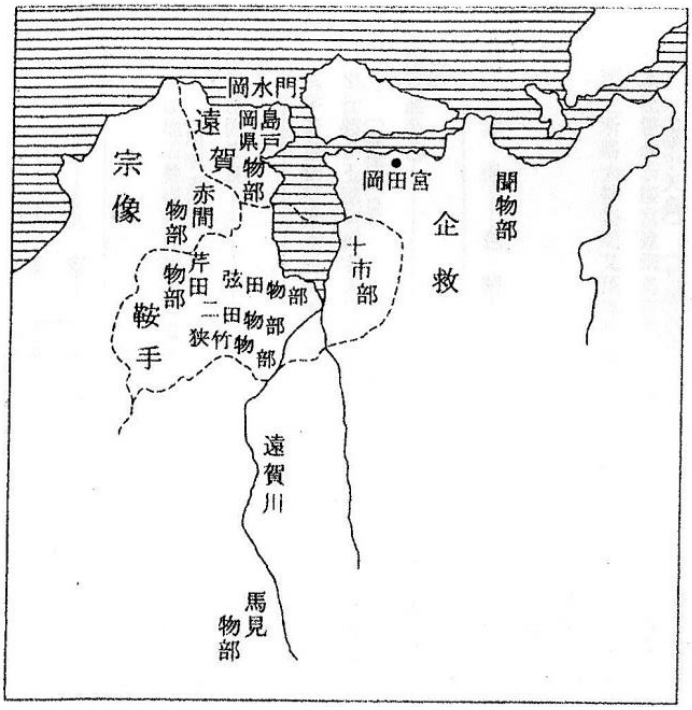
⑵『日本書紀』

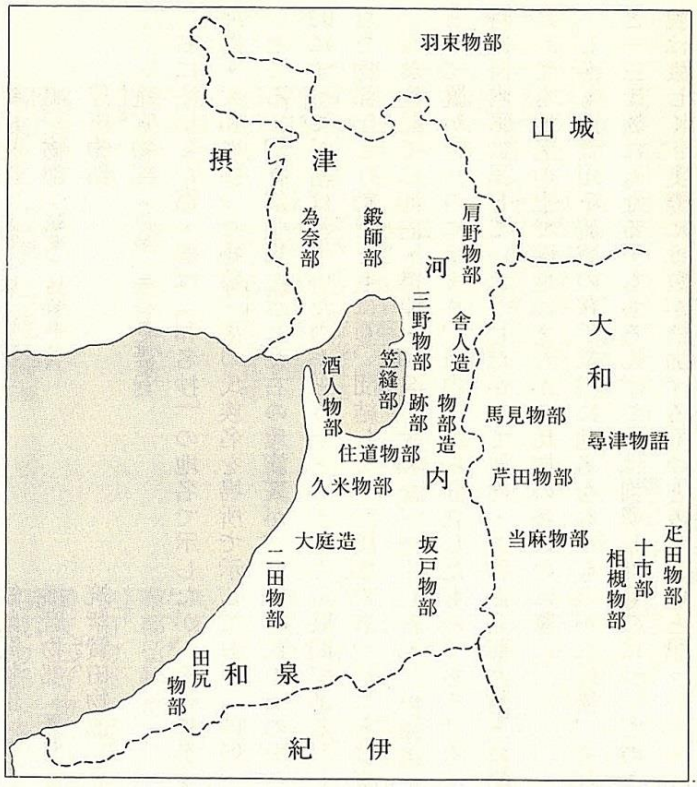
神武東遷に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり天磐船に乗って河内国（大阪府交神市）の河上の地に天降り、その後大和国（奈良県）に移った。

⑶『先代旧事本紀』

①ニギハヤヒは高千穂に天降ったニニギノミコトの弟とする。

②ニギハヤヒは北部九州の物部一族を率いて神武天皇より先に大和に天降り、近畿を支配した。





○東遷組織

(将軍	幕僚	司令官	副司令官	隊長	兵卒	御座船
ニギハヤヒ	32 人	5 人	5 人	25 人	数千人？	天の磐船

(4)ニギハヤヒに随行した 32 人(『先代旧事本紀』)

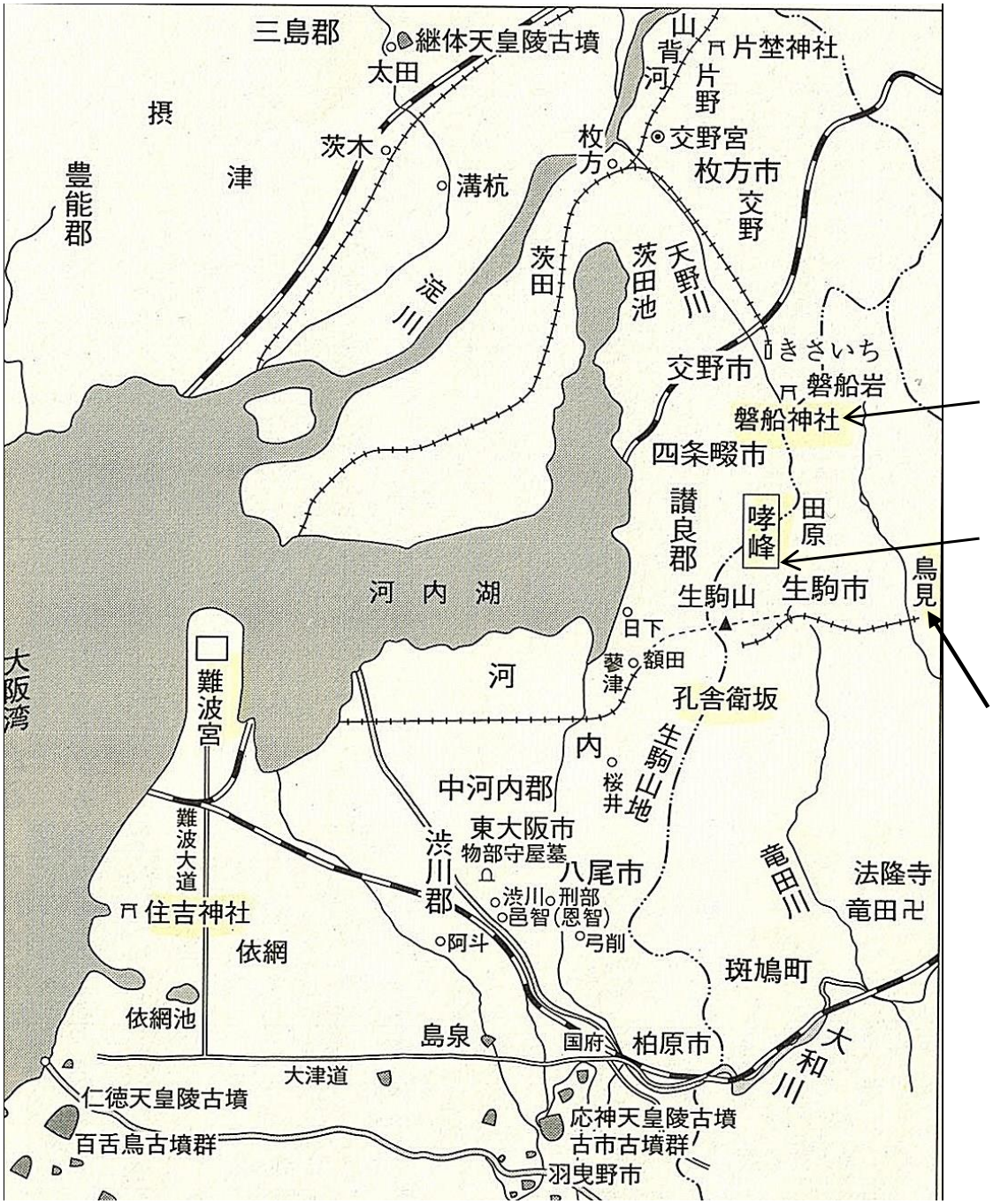
		天岩戸	天孫降臨
(1)天香語山命(あまのかごやま)	尾張連らの祖。		
(2)天鈿売命(あまのうずめ)	猿女君らの祖	○	○
(3)天太玉命(あまのふとたま)	忌部首らの祖	○	○
(4)天児屋命(あまのこやね)	中臣連らの祖	○	○
(5)天櫛玉命(あまのくしたま)	鴨県主らの祖		
(6)天道根命(あまのみちね)	川瀬造らの祖		
(7)天神玉命(あまのかむたま)	三嶋県主らの祖		
(8)天椹野命(あまのくぬ)	中跡(なかと)直らの祖		
(9)天糠戸命(あまのぬかと)	鏡作連らの祖		
(10)天明玉命(あまのあかるたま)	玉作連らの祖		
(11)天牟良雲命(あまのむらくも)	度会(わたらい)神主らの祖		
(12)天背男命(あまのせお)	山背久我直らの祖		
(13)天御陰命(あまのみかげ)	凡河内(おおしこうち)直らの祖		
(14)天造日女命(あまのつくりひめ)	阿曇連らの祖		
(15)天世平命(あまのよむけ)	久我直らの祖		
(16)天斗麻弥命(あまのとまね)	額田部湯坐(ぬかたべのゆえ)連らの祖		
(17)天背斗女命(あまのせとめ)	尾張中嶋海部直らの祖		
(18)天玉櫛彦命(あまのたまくしひこ)	間人(はしひと)連らの祖		
(19)天湯津彦命(あまのゆつひこ)	安芸国造らの祖		
(20)天神魂命(あまのかむたま)	葛野鴨(かどののかも)県主らの祖		
(21)天三降命(あまのみくだり)	豊国宇佐国造らの祖		
(22)天日神命(あまのひのかみ)	対馬県主らの祖		
(23)乳速日命(ちはやひのみこと)	広沸湍神麻続(ひろせかむおみ)連らの祖		
(24)八坂彦命(やさかひこ)	伊勢神麻続(いせのかむおみ)連らの祖		
(25)伊佐布魂命(いさふたま)	倭文(しどり)連らの祖		
(26)伊岐志迩保命(いきしにほ)	山代国造らの祖		
(27)活玉命(いくたま)	新田部 (にいたべ) 直の祖		
(28)少彦根命(すくなひこね)	鳥取 (ととり) 連らの祖		
(29)事湯彦命(ことゆつひこ)	取尾(とりお)連らの祖		
(30)表春命(うわはる・思金神の子)	信乃阿智祝部(あちのいわいべ)らの祖	△	△
(31)天下春命(したはる・思金神の子)	武蔵秩父国造らの祖	△	△
(32)月神命(つきのかみのみこと)	壱岐県主らの祖		

(5)ニギハヤヒは「河内国河上哮峯」に天降り

〇磐船神社(大阪府交野市私市 9 丁目)

【祭神】天照国照彦天火明奇玉神饒速日尊

高さ約 12 メートル・長さ約 12 メートルの舟形巨岩が御神体。本殿はなく、巨岩の前に小さな拝殿がある。

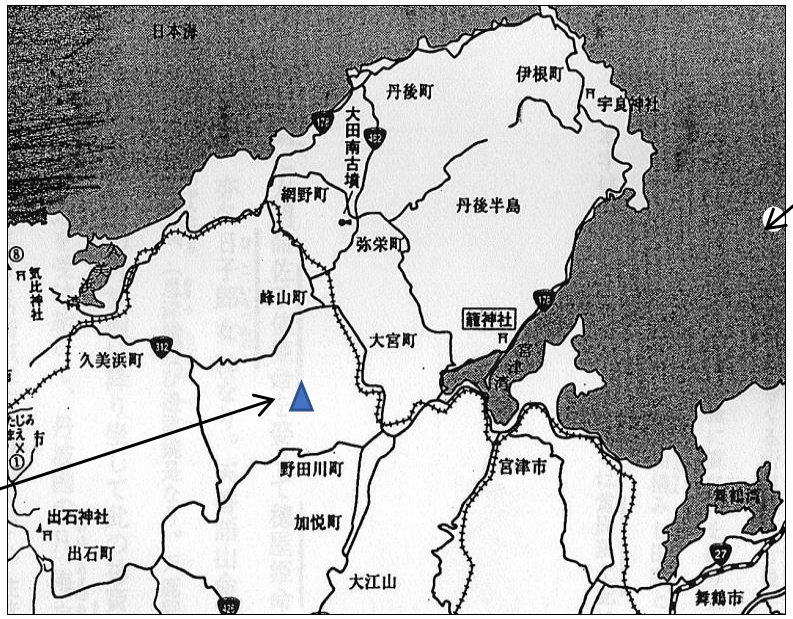


6、丹波のニギハヤヒ伝承

⑴京都府宮津市に鎮座する籠神社の社家・海部氏に伝わる系図

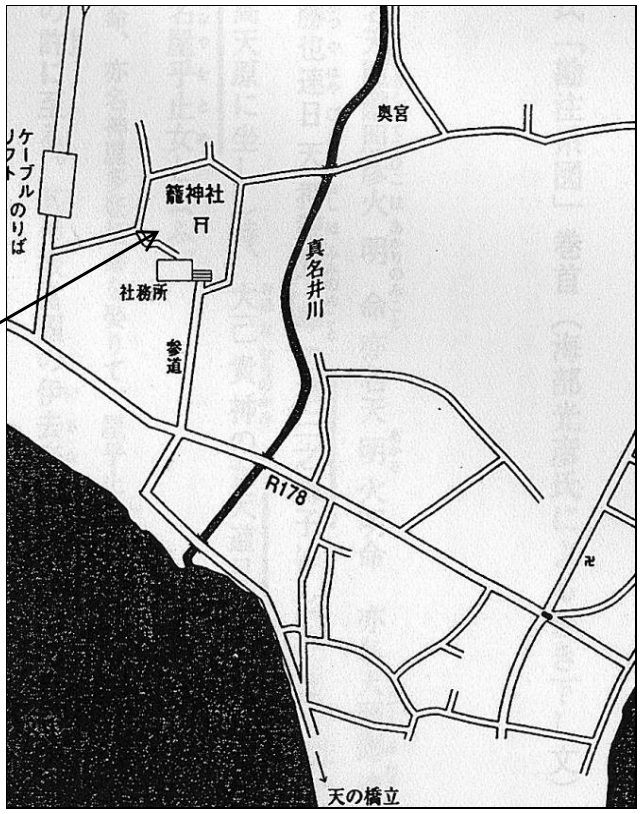
・『籠名神社祝部氏係図』1 巻（「本系図」）【S.51 国宝】

・『籠名神宮祝部丹波国造海部直等氏之本記』1 巻（「勘注系図」）【S.51 国宝】



冠(かんむり)島
沓(くつ)島

磯砂(いさなご)山(６６１ｍ)



元伊勢

(2) 「勘注系図」

始祖彦火明命

亦名天火明命亦名天照國照彦火明命亦名天明火明命　亦名天照御魂命。

此神は正哉吾勝勝也速日天押穂耳尊の第三之御子にして、母は高皇産霊神の女栲幡千々姫命なり。彦火明命高天原に坐しし時、大己貴神の女天道日女命を娶りて天香語山命を生みます。

天道日女命は亦名屋乎止女と云ふ。

（大己貴神多岐津姫命、亦名神屋多底姫命を娶りて、屋乎止女命、亦名高光日女命を生みます。）

天に上りて御祖の許に至る。其の後當國の伊去奈子嶽に降り坐す。

（丹後国は本、丹波國と合せて一國たり。日本根子天津御代豊國成姫天皇の御宇の時に、詔りして丹波國五郡を割きて丹後國を置く。丹波と号くる所以は往昔豊宇氣大神當國の伊佐奈子嶽に降り坐しし時、天道日女命等大神に五穀及桑蚕等の種を請ふ。即ち其嶽に眞名井を掘り其水を灌ぎて、以て水田陸田を定めて悉に植ゑ給ふ。即ち大神之を見そなはして大く歡喜びあなにえし面植みし田庭と詔り給ふ。其の後大神は復高天原に登ります。故田庭と云ふ。丹波の本字は田庭にして多尓波と訓ずるは當國風土記に在り。）

爾に火明命佐手依姫命を娶りて穂屋姫命を生みます。佐手依姫命は亦名市杵嶋姫命、亦名息津嶋姫命、亦名日子郎女神なり。天香語山命穂屋姫命を娶りて天村雲命を生みます。其の後天祖の二璽神寶（息津鏡及び邊津鏡是なり。天鹿兒弓と天羽々矢を副へ賜る。）を火明命に授け給ひて、汝宜しく葦原中國の丹波國に降り坐して此の神寶を齋き奉り、速かに國土を造り修めよと詔り給ふ。故爾に火明命之を受け給ひて、丹波國の凡海息津嶋に降り坐す。

（其の凡海と号くる所以は古老傳へて曰く、往昔天下治しめすに當り、大穴持神少彦名神と此地に到り坐しし時、海中の大嶋小嶋を引集へ、小嶋凡そ拾を以って壹の大嶋と成す、故名づけて凡海と云ふ。當國の風土記にあり。）

爾に火明命其の後由良の水門に遷り坐しし時、即ち其の神寶（邊津鏡是也）を香語山命に分け授け給ひ、汝宜しく此の神寶を齋ひ奉りて、速かに國土を造り修めよと詔り給ふ。彦火明命の又の名は饒速日命、亦名神饒速日命、亦の名は天照国照彦天火明櫛玉饒速日命、亦の名は膽杵磯丹杵穂命にして八州を統め給へり。已にして速日命即ち天磐船に乗り、虚空に登りて凡河内国に降り坐す。其の後大和國鳥見白辻山に遷り坐して、遂に登美屋彦の妹登美屋姫を娶りて可美眞手命を生みます。

是に即ち其の弓矢及び神衣帯手貫等を其の妃に授け、復天翔りて丹波國に遷り坐して、凡海の息津嶋に留り坐す

7、越の沼河比売(奴奈川姫)

⑴『日本書紀』には登場しない。

⑵『古事記』の大国主の神話の段に登場

八千矛神（大国主）が高志国の沼河に住む沼河比売(奴奈川姫)を妻にしようと思い、高志(越)国に出かけて沼河比売の家の外から求婚の歌を詠んだ。沼河比売はそれに応じる歌を返し、翌日の夜、二人は結婚した。

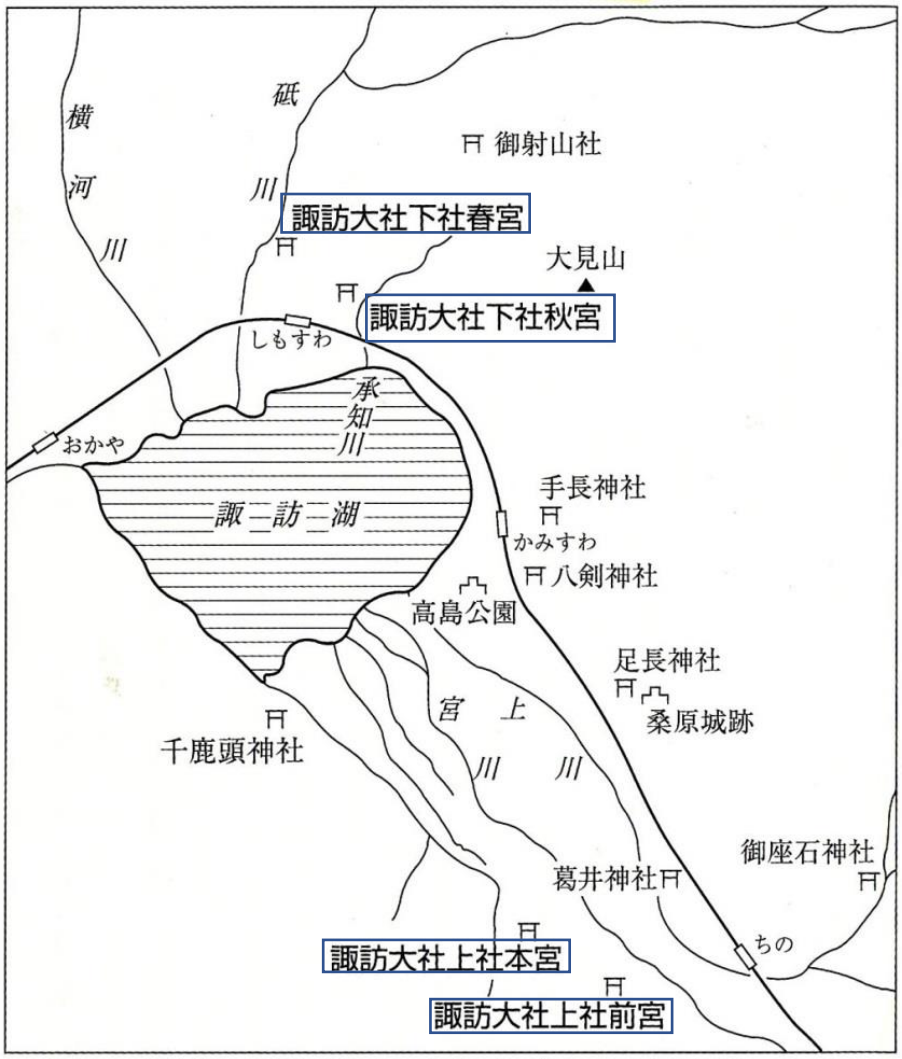
⑶糸魚川の伝承

新潟県糸魚川市に残る伝承では、大国主と沼河比売との間に生まれた子が建御名方神で、姫川をさかのぼって諏訪に入り、諏訪大社の祭神になったという。

① **上社本宮の祭神**・・建御名方神

② **上社前宮の祭神**・・建御名方神の妃の八坂刀売(やさかとめ)神

③ **下社の春宮・秋宮の祭神**・・建御名方神と八坂刀売神（配祀)事代主神



地図11　諏訪神社の場所（谷川健一編『日本の神々 9』〔白水社刊〕による）

⑷『先代旧事本紀』

建御名方神を沼河比売（高志沼河姫）の子としている。

⑸ 沼河比売を祀る神社

越後国頸城(くびき)郡の式内社に沼河比売を祀る奴奈川神社がある。

天津神社境内社・奴奈川神社をはじめ、新潟県糸魚川市内に論社が 3 社ある。また、長野県にも沼河比売を祭る神社があり、姫の乗っていた鹿の蹄石が残されている。

⑹ 『万葉集』（巻十三　三二四七　作者未詳）の歌

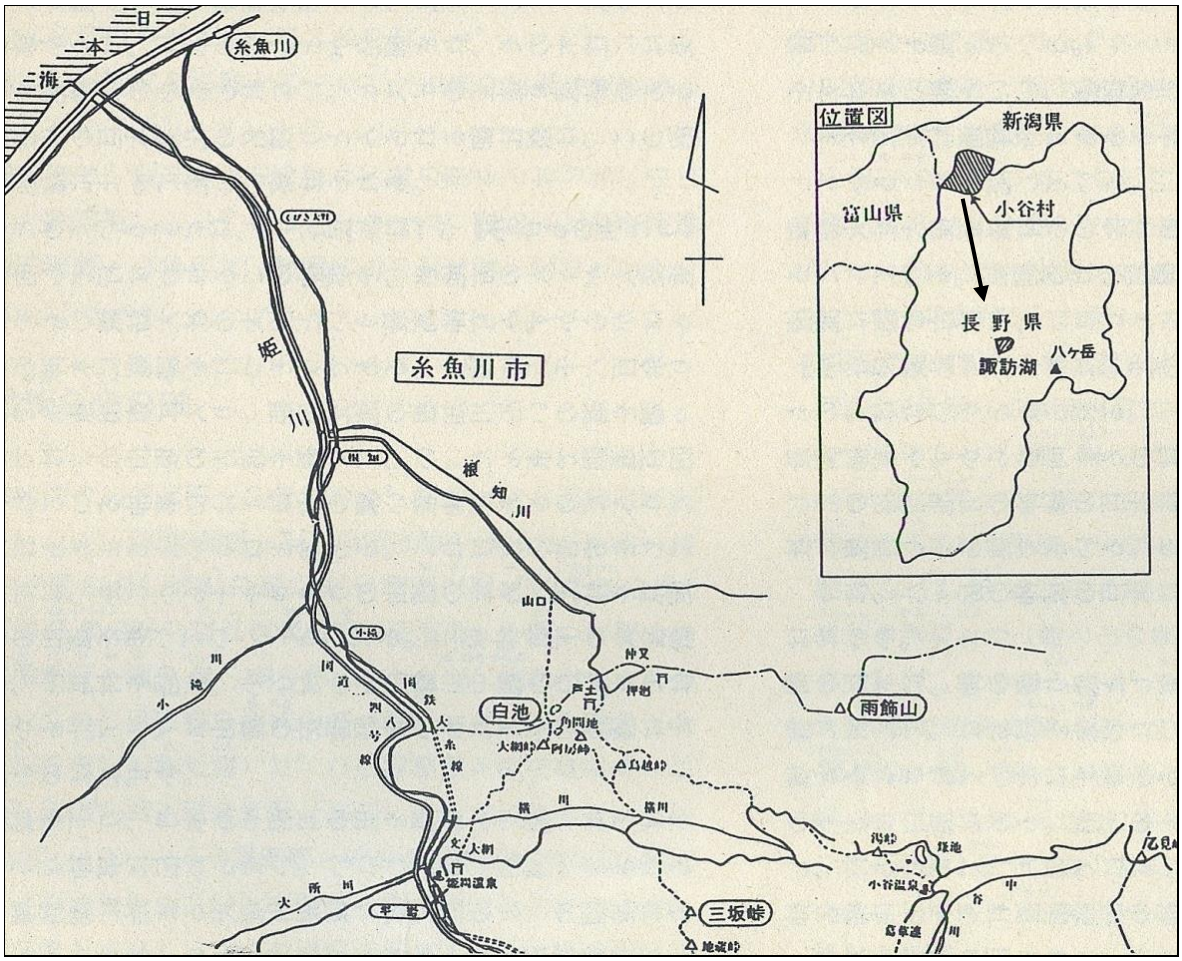
「渟名河（ぬなかは）の　底なる玉　求めて　得まし玉かも　拾ひて　得まし玉かも　惜（あたら）しき君が　老ゆらく惜（を）しも」

「渟名河」は現在の姫川で、その名は沼河比売に由来し、「底なる玉」はヒスイ（翡翠）を指し、沼河比売はこの地のヒスイを支配する女王であった。

「ぬ」には玉石の意味があり、「ぬなかわ」とは「玉の川」となる。

8、沼河比売(奴奈川姫)はヒスイの女王

⑴ 出身は高志(越)の国――新潟県糸魚川市



⑵平安時代の『和名抄』

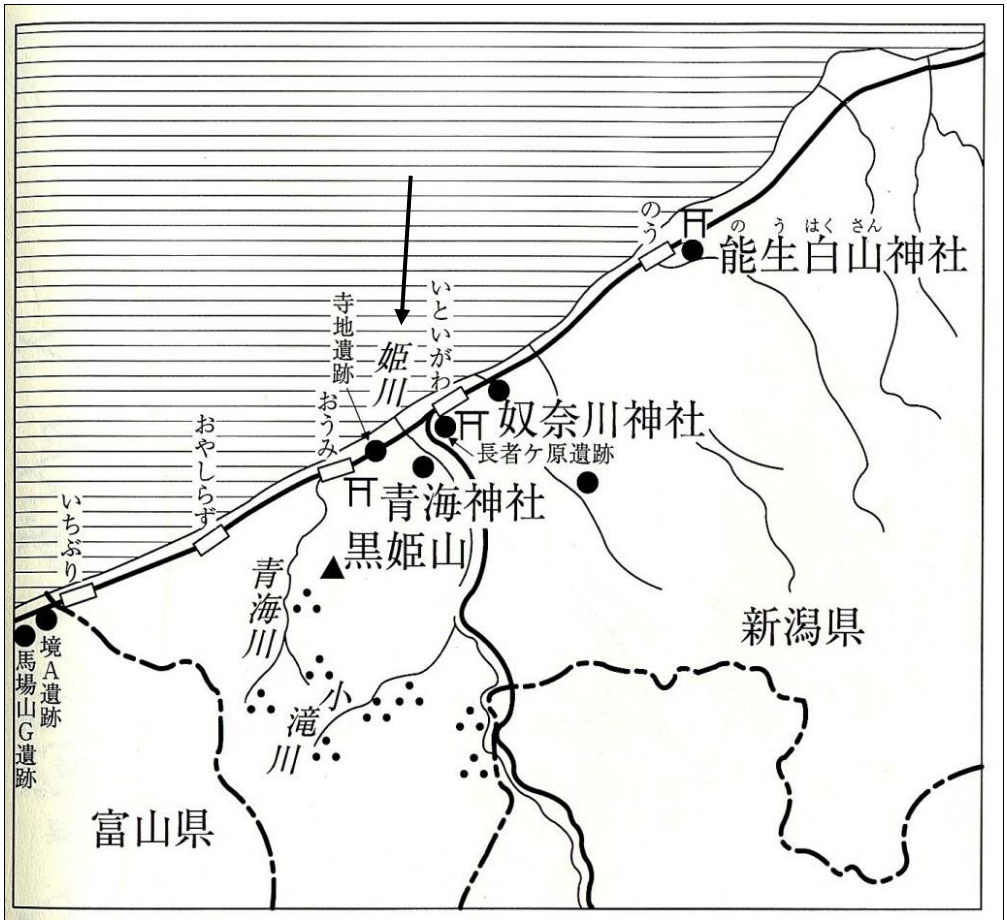
①頸城(くびき)郡の沼川(奴乃加波)郷

糸魚川市の姫川に沿った地域で後世の西頸城郡

②西頸城郡青海町の大角地(おがくち)遺跡

約７千年前のヒスイが出土した。このヒスイの発見により、ヒスイが装飾品として利用される前は石を加工する道具として使われていたことが分かった。世界最古の使用例という。

⑶ 沼河比売の拠点は姫川流域――奴奈川神社



∴原産地　●玉生産遺跡

地図10　翡翠の原産地と玉生産遺跡

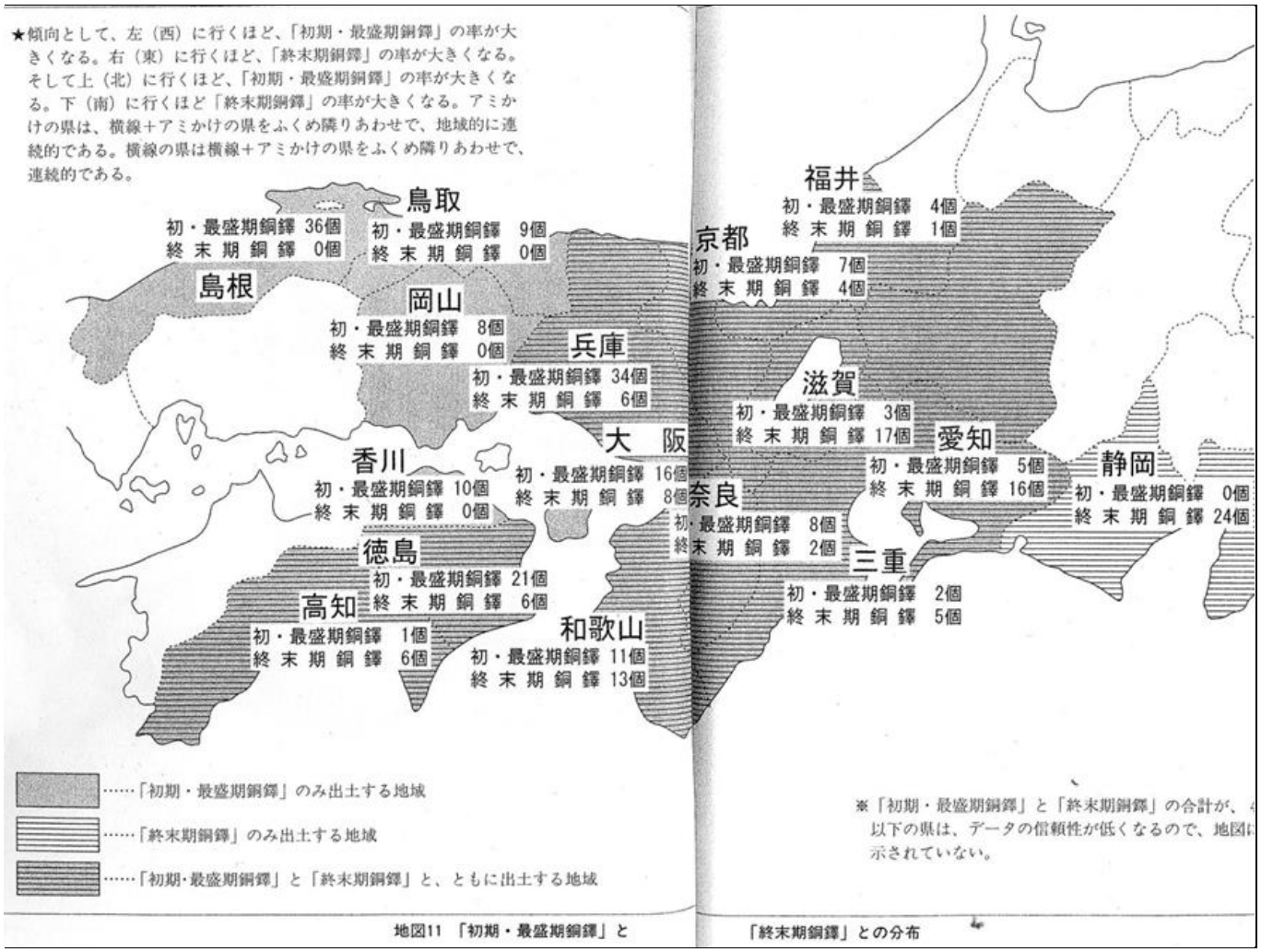
（『延喜式』記載の「奴奈川神社」は、能生白山神社のこととする文献もある。能生白山神社は、延久５年〔1073〕の資料にあらわれる「布川社」のことと考える説がある。）

② 沼河比売を祀る奴奈川神社(越後一宮の天津神社内・糸魚川市一の宮 1-3-34)

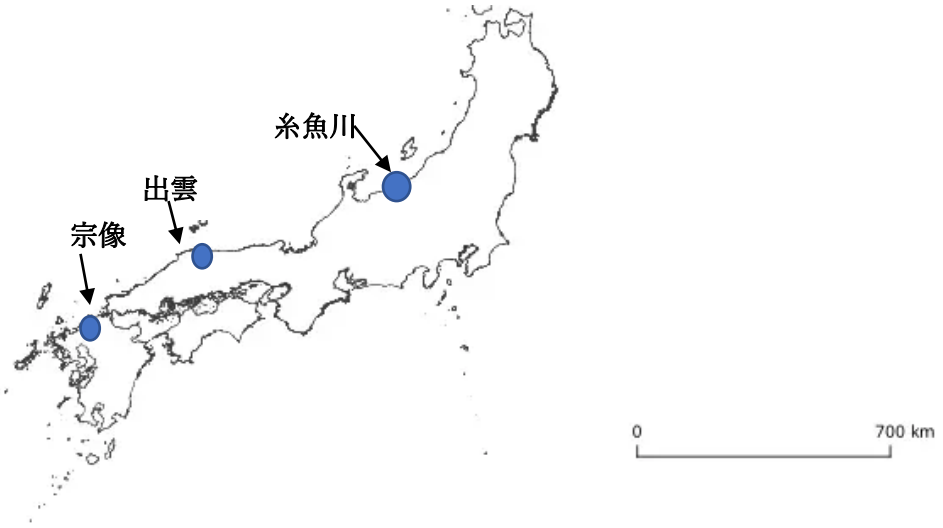
このあたりは、もと「沼川郷」といった。

9、出雲の大国主命

(1)大国主命の支配領域――銅鐸の分布



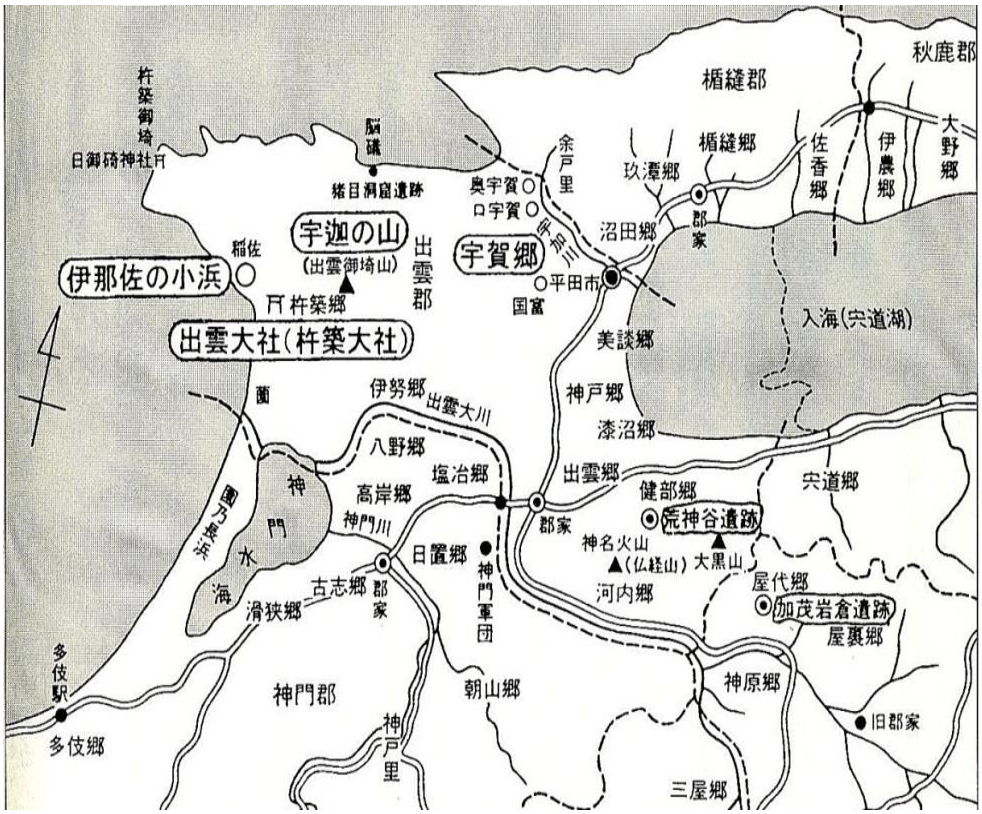
地図11 「初期・最盛期銅鐸」と「終末期銅鐸」との分布



沼河比売――**大国主命**――多岐都比売命――多紀理毘売命

建御名方命　　事代主命　　阿遅鉏高日子根神

⑵出雲の国譲り



⑵出雲大社復元図(大林組)

① もと「杵築大社(きつきたいしゃ)」

明治 4 年（1871 年）に「出雲大社」と改称された。

② 壮大な神社

『古事記』『日本書紀』には、神殿の柱は高く太く、厚い板をもって千木高く掲げて築かれたと書かれている。古来より「国中第一之霊神」として称えられ、本殿は「天下無双之大廈」と評された。

③ 規模

㋐社伝

神殿の高さは、上古には 32 丈(約 96m)、中古には 16 丈(約 48m)とある。

㋑平安時代の『口遊(くちづさみ)』(源為憲著)

当時の建物の大きさのベスト 3 が「雲太(うんた)、和二(わに)、京三」として記されている。

○「雲太（うんた)」(出雲太郎)　・・出雲大社（16 丈・48 メートル）

○「和二（わに)」(大和二郎)　・・奈良の東大寺大仏殿（15 丈・45 メートル）

○「京三（きょうさん)」(京三郎)・・京都の大極殿

④『金輪御造営差図(かなわのごぞうえいずさしず)』(本居宣長の『玉勝間』)

柱の太さが 1 丈（3m）もあり、しかも 9 本の柱はそれぞれ、3 本の木を鉄の輪で 1 つに束ねってあって、まさに異様とも言える巨大さだった。それに加えて、前面に描かれた引橋の長さが 1 町（約 109m）と記されている。

これをもとに大林組が復元図を作成した。

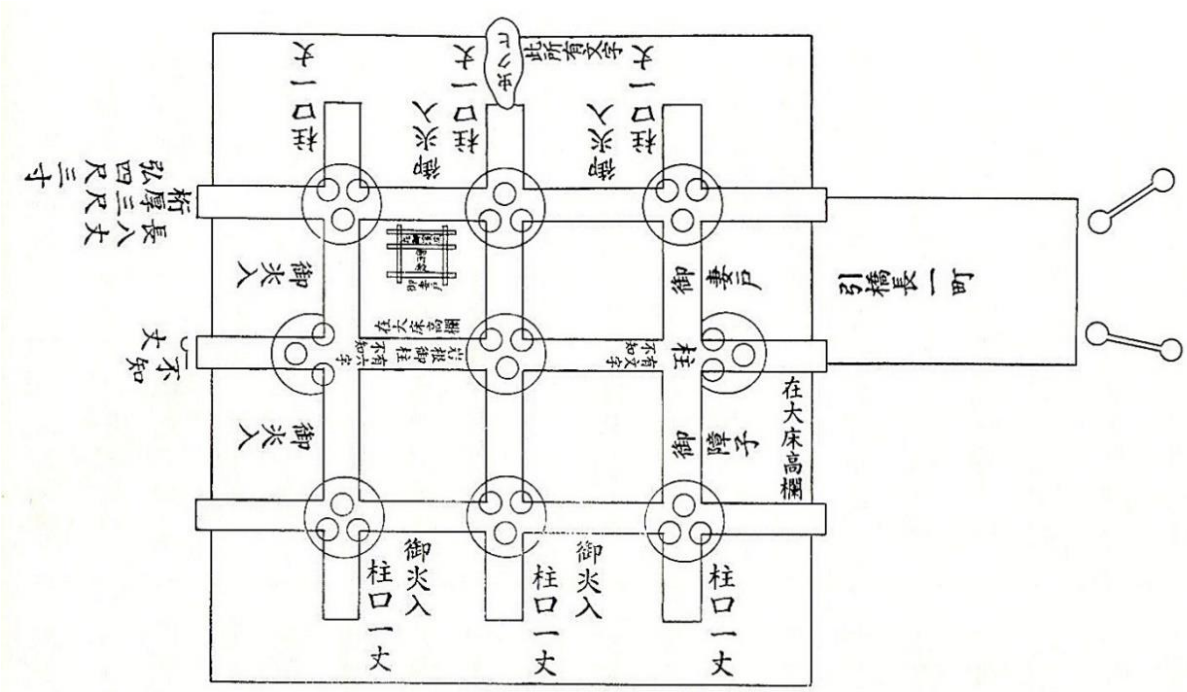


図 5　金輪の造営の図

⑤出雲大社から出土した巨大な柱

平成 12 年（2000 年)、地下祭礼準備室建設にともなう事前調査に際し、境内からは勾玉などのほか、巨大な柱（1 本約 1.4m の柱を 3 本束ねたもの）が発掘された。中世の遺構で現在とほぼ同規模であり、宝治 2 年（1248 年）造営の本殿である可能性が高いといわれている。

出土した「宇豆柱」。３本を金輪で束ねていたと考えられている。

⑥現在の本殿

延享元年（1744 年）に作られた。高さは 8 丈（およそ 24m）。

10、筑紫の高天原勢力の拡大

⑴天照大神の次世代

	派遣された者		略　　歴
⑴出雲の国譲り	①	天忍穂耳命	天照大神の子
	②	天穂日命	天照大神の子
	③	天若日子	大国主神の娘の下照比売と結婚
	④	雉の鳴女	
	⑤	建御雷神 経津主神	甕速日神の子(『古語拾遺』、但し諸説あり) 磐筒男神の子（『古語拾遺』）
	⑥	天穂日命	最終的に出雲を統治
⑵日向への天孫降臨	ニニギノミコト		天照大神の孫
⑶近畿東遷	ニギハヤヒノミコト		天照大神の孫

※ 関係者は総じて天照大神の子あるいは孫の世代

※ 時間的な順序は次のとおりとみられる。

⑴出雲の国譲り(天照大神の次世代)→⑵日向への天孫降臨(天照大神の孫世代)→⑶ニギハヤヒの近畿東遷(天照大神の孫世代)→神武東遷

(2)略年表の試案

300 290 280 270 260 250 240 230 220 210 200 190 18

神武天皇

邇邇芸命

穂穂出見命（山幸彦）

鵜葺草葺不合命

豊秋津師比売（台与）・天忍穂耳命

天照大神（卑弥呼）

大和朝廷

日向三代

邪馬台国の時代

245 魏の少帝、倭の難升米に黄幢を賜い帯方郡に付して仮授させる。

247 卑弥呼、使載斯烏越らを帯方郡に遣わし、狗奴国男王卑弥弓呼との交戦を告げる。魏の少帝、塞曹掾史張政らを倭に遣わし、詔書・黄幢を難升米に与える。

248 この頃、卑弥呼没す。

247 狗奴国と対立

スサノオ追放（出雲へ）

260 出雲の国譲り

天孫降臨（日向へ）

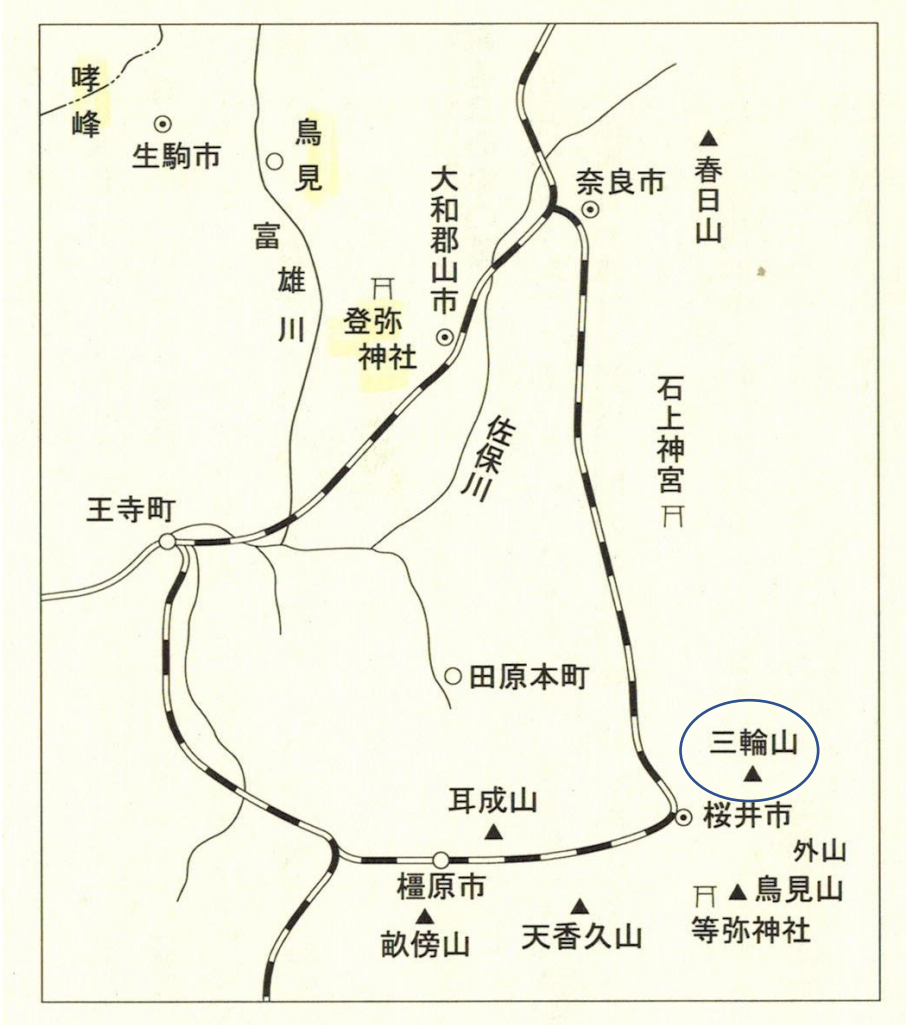
266 ニギハヤヒの東遷（近畿へ）

倭の女王、使を西晋に遣わす

・神武東遷（近畿へ）

11、その後の宗像一族

(1)大和(奈良県)の三輪山に祭られた大物主神



文　献	三輪山の大神神社の祭神
『日本書紀』巻１神代上	大三輪神
『日本書紀』巻１神代上	事代主神
『日本書紀』巻３「神武紀」	事代主神
『日本書紀』巻４「綏靖紀」	事代主神
『古事記』中巻・神武記	大物主神
『先代旧事本紀』	事代主神

大物主神＝事代主神の可能性が高い。

・出雲の大物主神(事代主神)と勢夜陀多良比売との間に生まれた娘の媛蹈鞴五十鈴媛（ひめたたらいすずひめ）が神武天皇の妃。

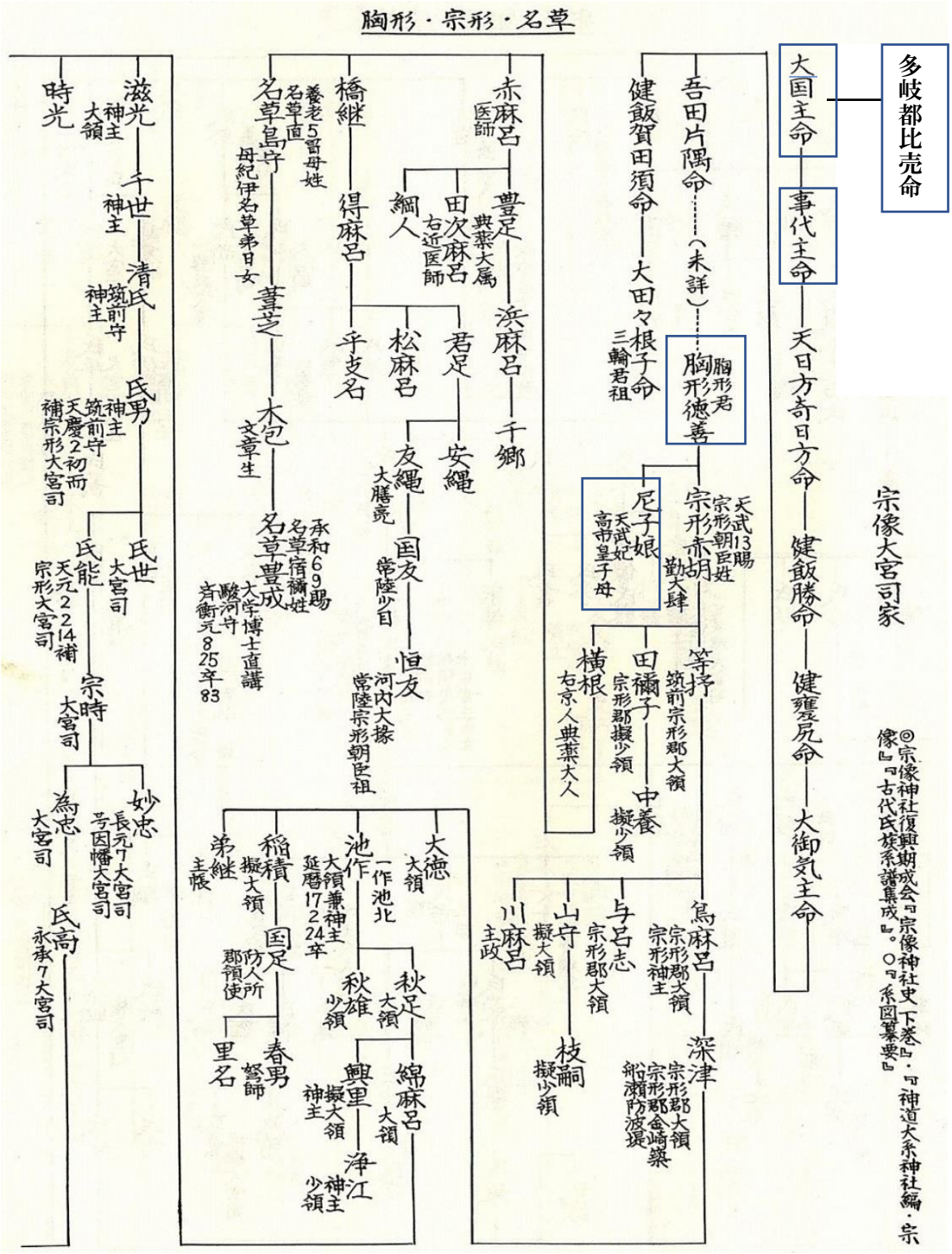
・大物主神(事代主神)の母は宗像の多岐都比売命である。母系からみると、天皇家は宗像三女神の血統を継承していることになる。

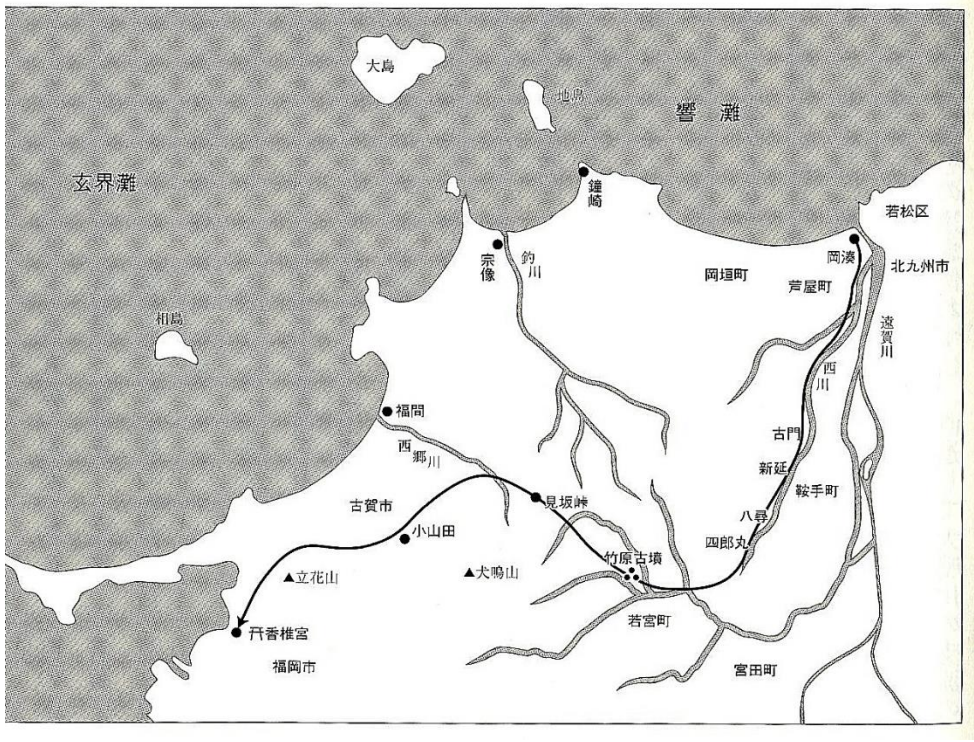
⑵宗像三女神を祖とする宗像氏

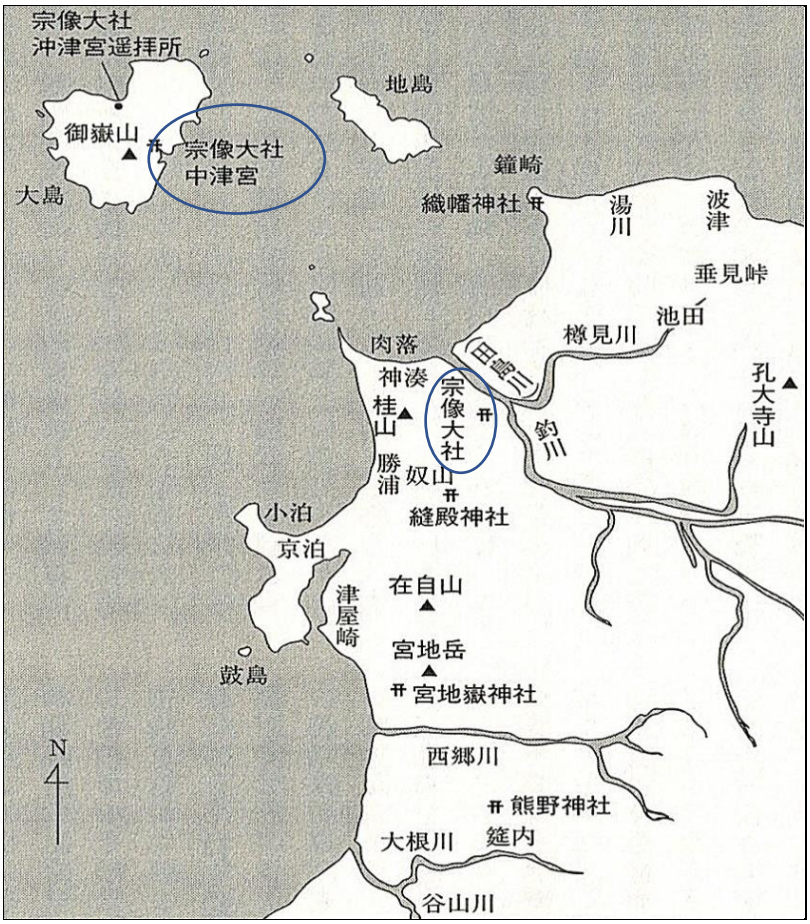
①胸に入れ墨を施した海人族

胸形氏、宗形氏、胸肩氏などと表記され、宗像、響灘、玄界灘、日本海、瀬戸内海を往来した海人族

②宗像氏は大国主命と多岐都比売命を始祖とする。




大島
地島
響灘
玄界灘
鐘崎
若松区
宗像
釣川
岡湊
北九州市
岡垣町
芦屋町
相島
遠賀川
西川
福間
古門
西郷川
新延
鞍手町
古賀市
見坂峠
八尋
小山田
四郎丸
竹原古墳
立花山
犬鳴山
若宮町
香椎宮
福岡市
宮田町


宗像大社
沖津宮遥拝所
地島
御嶽山
宗像大社
中津宮
大島
鐘崎
織幡神社
湯川
波津
垂見峠
池田
樽見川
肉落
田島川
神湊
宗像大社
孔大寺山
桂山
釣川
勝浦
奴山
縫殿神社
小泊
京泊
在自山
津屋崎
宮地岳
鼓島
宮地嶽神社
N
西郷川
熊野神社
大根川
筵内
谷山川

河村哲夫(かわむら・てつお)

1947 年(昭和 22)年福岡県柳川市生まれ。
九州大学法学部卒
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師
朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師

〈おもな著作〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全 5 巻)』(1995 年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998 年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
『立花宗茂』(1999 年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999 年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001 年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003 年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年 11 月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』97 号、98 号)
「九州における景行天皇伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』99 号)
「『季刊邪馬台国』100 号への軌跡」(2008 年、『季刊邪馬台国』100 号)
「小楠と立花壱岐」(2009 年 11 月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010 年 3 月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011 年 1 月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012 年 8 月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013 年 12 月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014 年 6 月原書房)
『法顕の旅・ブッダへの道』(2012～2016 年『季刊邪馬台国』114 号～124 号に連載)

(テレビ・ラジオ出演)

平成 31 年 1 月 NHK「日本人のおなまえっ！　金栗の由来・ルーツ」
平成 28 年より RKB ラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演